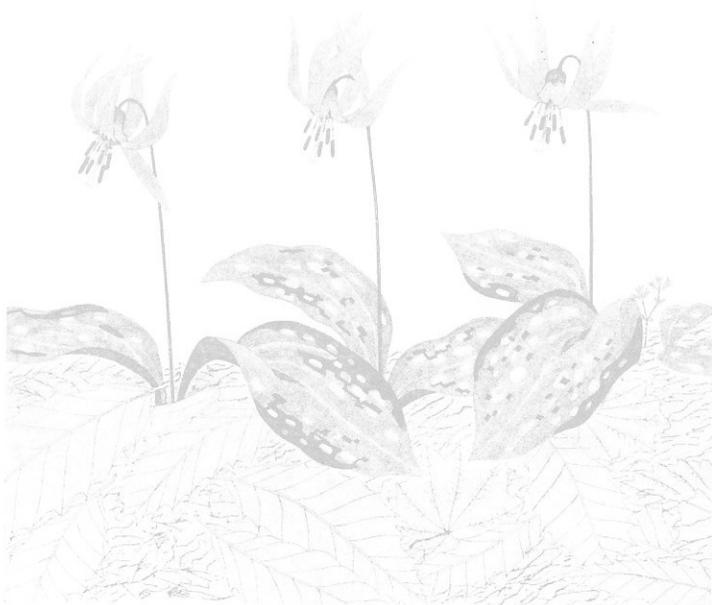


透



香川県立観音寺第一高等学校同窓会東京支部

ホームページ <http://www.kan1.jp>

特集 鼎談「先輩に学ぶ」(第1回)

横山信二郎さん(三中22回)に学ぶ

出席者(敬称略)

高橋 達(三中40回)

月原茂皓(観一6回)

岸井成格(毎日新聞社特別編集委員)



「先輩に学ぶ」シリーズの皮切りとして、同窓会東京支部の歴史にとって生みの親・育ての親としての大功労者、横山信二郎(よこやま・のぶじろう)さんⅡ上写真・

故人Ⅱに登場していただきます。後輩の高橋達さん、月原茂皓さんの両人は横山さんが仲人であり、横山さんの

薫陶を受けた関係です。また、岸井成格さんは、メディアで今を時めく有名人ですが、岸井さんの父、寿郎さんは横山さんが生涯頭の上からぬ恩人という関係で、特別に登場をお願いしました。岸井さんは毎日新聞の仕事のほかTBSテレビの人気番組『サンデーモーニング』、『みのもんたの朝ズバッ!』にレギュラー出演するなど超多忙であるにもかかわらず、この鼎談への出席を快諾いただきました。こうして、この鼎談によって横山信二郎さんを偲び、先輩・横山さんに学ぶこととしました。いま日本の風潮は、自分のことばかりに執着し、「人の為に尽くす」ことは珍しい中であって、横山さんの生き様は、必ずや後輩にとって新鮮な響きとして伝わることでしょう。(司会／構成Ⅱ安藤政弘(観一9回)、写真撮影Ⅱ牧潤二(観一20回))

信さんとの出会い

―大先輩の横山さんには失礼ですが、「信さん」の愛

称があまりにも有名ですので、本日はこの愛称で統一して進行します。高橋さんは信さんの番頭役（執事役）的存在で三中同窓会の「語り部」的存在ですから。

高橋 この「回想三豊中学」（中井虎男著・佐野増彦編



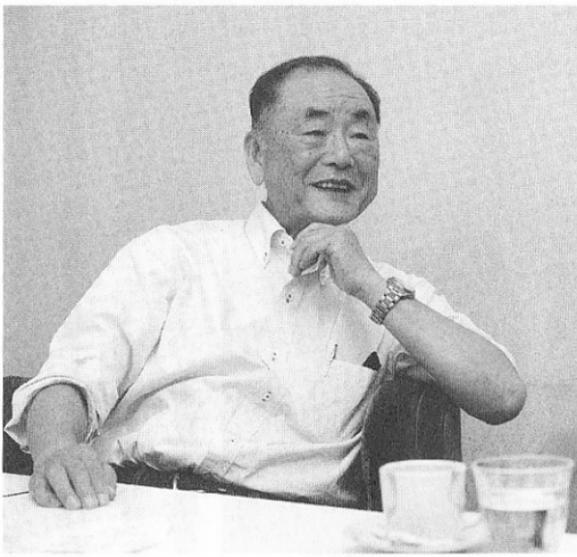
高橋 達 氏

集）の57頁（6回卒）に「岸井君は三高から東大を出て東京日日新聞（現・毎日新聞）の政治部長として健筆をふるわれ……」とあります。岸井さんの父寿郎さんは、三中6回卒で、戦時中、三中出身第一号代議士でしかも毎日新聞中興の祖といわれ、二番目が大平正芳元総理（三中24回）で、三番目が月原茂皓。信さんは典型的な「野球狂い」で三中時代は落第してまで翌年に賭ける程でした。三中卒業後、関西学院大に合格したものの、入学金を納付せず、神戸のスター球団で野球に興じていた。それが実家にバレ、当時東京日日新聞社（現毎日新聞社）営業局にいた叔父の横山慶太郎さん（慶大卒）に母親が泣きつき、叔父さんが当時東京日日新聞社の役員にいた岸井さんの父寿郎に頼み込んで毎日新聞に入社できたのです。

—月原さんと信さんとの出会いは

月原 奉天（現・瀋陽）の小学生の頃です。私の叔父田中（三中5回、当時、満州住友の人事部長）宅に兵役中

の信さんが仲間（後の西原理一町長）を大勢連れて、腹一杯ごちそうになっていました。私が和歌山県警の頃（注1）、元毎日新聞和歌山支局長だった原田仁さん（三中17回）が和歌山財界で活躍中で、岸井寿郎さんが、毎日新聞の人事刷新を断行し、自らもその責任を取られたエピソードをよく聞かされました。



月原茂皓 氏

—岸井さんと信さんとの出会いは

岸井 信さんと呼ぶにはまことにおこがましい限りで、私にとっては会社の大先輩で恩義のある方です。私のことをいつも気にかけてくれた本当にありがたい存在でした。私が熊本支局時代、水俣問題などで私は熊本に骨を埋める覚悟でいました。ところが突然「東京政治部」に転任になった。後になって判ったことですが、信さんの強い働きかけがあったとのことでした。信さんが私の親父の意向を汲んだのか、信さん自身の意向か判りませんが、いずれにしても信さんの強い働きかけがあったことが、随分後になって知らされました。信さんらしい気くばりの見本で、改めて信さんの人柄が偲ばれます。

—高橋さんと信さんはまさに一心同体ですね。

高橋 私は昭和19年に師範学校に入学して、昭和20年に学徒出陣した。戦後、新制大野原中学で教員生活を二年してから上京して、佐野増彦先輩宅で居候し、河出書房

で、アルバイトしながら旧制大学に進学しました。就職の相談を佐野先輩にしたら「お前程度の読書力では新聞社の編集ではとても偉くなれない。販売の方が、向いている。毎日新聞の販売に信さんがいる。面倒見が桁外れに良い奴だから、とにかく早く行け。もし駄目だったら来年読売が大阪に進出する、その時は何とかするから」といわれた。

信さんに会った途端「おう、木之郷の岩五郎はんの息子か、判った。俺の所に来い。他は全部断われ、ちゃんを入れてやるから」といわれた。昭和27年に新聞の販売システムが専売制になり、各新聞社はどこも販売に向けた人材が必要な年でもあった。

岸井 それは本当ですか？ まさに驚きですね。昭和28年頃の毎日ですか！ 今ではとても考えられないですね。

高橋 昭和28年は新・旧制大学が一度に卒業という就職難の年のうえ、大変なハンデを負った私にとって両先輩は生涯の大恩人です。結婚式は、佐野・横山両夫妻の仲

人だった。主賓の挨拶が河出書房の河出孝雄社長で「うちの社員になる男を毎日新聞がかつさらった」といわれた。

信さんと毎日新聞

—信さんの毎日での仕事ぶりやエピソードには事欠かないと思いますが。

高橋 私が入社半年後に、信さんが販売副部長から出版業務部長に配置替りになり、烈火の如く怒っていました。この怒りをバネにして、それこそ「仕事の鬼」となって、サンデー毎日黄金時代を樹立しました。昭和31年には139万部の成績を上げ「週刊朝日」を抜き、週刊誌としての金字塔を建立しました。

岸井 ウーン！ 140万部ですか。いまサンデー毎日は10万足らずですから、まさに金字塔です。

高橋 週刊誌は売店の目立つ所にいかに置くかで勝負が決まる。ポンコツの車で売店廻りを徹底し、売り子のオ



岸井成格 氏

バチャンにそつと記念品を渡し、サンデーはこの角のところへネと目立つ所に置き替えた。そのタイミングと動作が明るく抜群なため、売店で大人気でした。これで部数を大幅に伸ばした。

—コンビニやスーパーでも陳列場所が命ですからね。

(笑)

岸井 駅売店では一駅一駅巡回したとの伝説が社内でも有名で、信さんは「仕事の鬼」でした。

月原 名古屋営業局長の頃、私の妻の実家（愛知県富市）に行ったとき、いきなりこの家は何新聞かといって中日を毎日に切替えさせられたばかりでなく、近所軒並み毎日に替えさせられた。信さんの憎めない人柄と、氣迫に圧倒させられるあの根性は見上げたものです。

(笑)

サンデー毎日黄金時代

—販売の鬼もさることながら、企画の立案と遂行力もすさまじかったのでは？

高橋 企画力とその実行力は抜群でした。当時の文豪吉川英治さんを口説きサンデー毎日の目玉として名を高め、有吉佐和子「恍惚の人」、山崎豊子「白い巨塔」など、一世を風靡し、一躍文壇のヒーローとして世に出し、次々とクリーンヒットさせました。



司会・構成：安藤政弘

—有吉さんも山崎さんも気むずかしいタイプと聞きましたが、よくぞ口説いて世に出しましたね。

岸井 毎日の歴史にとって、信さんは出版局全盛時代の立役者です。

高橋 信さんは晩年になって、出版局に行つて本当に良かった、とつくづく述懐していました。

月原 吉川英治、五味康祐さんの話をよく聞きました。

高橋 販売から外された時は恨んでいました。編集や販売から外されることは、当時としては左遷ですから。

—岸井さんも一時サンデー毎日に行きましたが、あれも外されたのですか。

岸井 いやあれは外されたのではなくて休業ですよ。当時サンデー毎日編集者は皆出世しましたから、あれは登龍門でした。

—ピラミッドの記事は有名でしたから、売上げ伸ばしたのではないですか。

岸井 いや逆で、伸びませんでした。(笑)

東京同窓会づくり

—信さんといえば東京同窓会にとってかけがえのない功労者です。学苑社の佐野 剛・正兄弟の話では、信さんと高橋さんが頻繁に来られ、いささか辟易したが、その情熱にはかなわなかったといわれています。



高橋 ある日突然信さんから「日本橋三越大食堂」に一緒に来いとの命があり、三中東京同窓会の初の総会で、加藤藤太郎、松田伊三雄（三中10回）三越社長、岸井寿郎、佐野増彦など重鎮がずらりといて、この時松田三越社長が東京同窓会長に就任し、その後総会は毎年三越日本橋大食堂で行なわれるようになった。三越大食堂にとって午後6時は一番のかき入れ時なのにクローズして一田舎の同窓会が借り切るといえるのは全く異例のことであった。同窓会の事務局は本店秘書室という今ではとても考えられない事です。

岸井 よくそんな大それたことができましたね。（笑）

高橋 三越本店大食堂の料理ですから、旨い料理が腹一杯食える。毎年会員が大幅に増えました。

月原 大変な評判で、東京同窓会発展の礎になりましたね。

—この同窓会誌『燧』は全国高校同窓会の中で極めてユニークですが、大先輩や信さん高橋さん始め、佐野

剛・正兄弟の学苑社があつたればのことと思いますが。

高橋 学苑社の佐野兄弟のお陰です。毎年の発行は無理だといわれたのを、拝み倒して「今年限りで頼む」と言い続け、今日に至っております。学苑社なくして今日の存在はとも無理でした。継続はまさに力で、『燧』の評判は高く全国高校同窓会の中でも貴重な存在です。これが昨年の『燧』です。

岸井 すごくいいことですね。立派です。

大平総理誕生の朝

高橋 大平総裁勝利の朝、「おい高橋君すぐタクシー拾つて来い!!」と瀬田の私邸に行ったら、祝賀客で一杯の中「身内の者だ」と言ってどンドン入って行く。丁度大平さんが玄関に出て来たところの写真がこれです。安藤君が組閣の朝、玄関で靴べらを添えている写真が毎日の夕刊一面トップに出ました。

—あの写真のせいで、党や省庁に行つて皆から「靴べ

らが来た」とひやかされました。

岸井 あの写真には数々のエピソードがありましたね。

(笑)

高橋 そして、大平総理誕生の時、出張から帰社すると私の机の上に大きな鯛が置いてあり、信さんに電話するようメモがある。電話するとすぐ瀬田の私邸に届けろとの命でした。万事この調子で信さんからの指令はいつも突然でしかもすぐやれということでした。

信さんの信念の源泉は

高橋 信さんは個人的打算は全く無く、母校や郷土、毎日新聞のためには何をさし置いても、全身全霊で成し遂げる人でした。

月原 人の為には、何事も一直線の人でした。無私無欲でしたが人の為にはとことん尽す。この魅力的な人柄が文壇の大御所吉川英治さんや有吉さん、山崎さんの心を捉えて離さなかつたのでしょう。

岸井 信さんの毎日での数々のエピソードは今でも語り

草で、サンデー毎日黄金期の金字塔は光り輝いています。

—佐野増彦先輩、信さんからあれこれ命ぜられ、大変だったでしょうが、高橋さんの人生も波乱万丈ではないですか。

高橋 私の毎日新聞での人生全て信さんのお陰です。北海道転勤し室蘭・苫小牧の担当当時、高橋のためということ、当時超人気作家の源氏鶏太、五味康祐、三宅艶子を送り込んで講演会やサイン会で売上部数を伸ばす応援をしてくれました。

—大変な深情けですね。

高橋 その次には高橋のためにと力道山を送ってよこした。ところが力道山は金をちゃんと積まないとリングに上らないとゴネられ、その金策に大往生しました。特殊な興業の世界のことで、仁義作法がわからず命がけで金を集め、何とか成功しましたが、お陰で室蘭のみならず苫小牧など周辺の販売部数増につながりました。これら

全て信さんの深情けのお陰です。

—万人に信望の厚かった信さんの人間性はどこでつちかわれたのでしょうか。

月原 先ほど高橋さんの話にあった、三中時代の「野球狂い」といわれる程野球に没頭した青春の群像ではないでしょうか。

岸井 信さんが入社の時、私の父との対面でいつもの信さんらしくなく、異常に緊張したそうです。何でそんなに緊張したのか不思議に思っていたのですが、先程の話でやっとその謎が解けました。叔父さんの慶太郎さんから、野球狂の件を存分に論してくれと父に頼んでいたのでしょうか。ところが父は「よし、しっかりやれ」と激励されたのでホッとしたそうです。そのことがあったのか、私に対する気づかいは並々ならぬもので、つくづく感謝しています。

—昭和33年皇太子ご婚約は戦後最大の明るいニュースでしたが、この時の小泉信三さんは大功労者でしたが、

信さんと小泉さんと何故親交があったのでしょうか？

高橋 そうなんです、人の為に尽す信さんの真骨頂で、

まさに君子の交わりだと思います。小泉さんは大人格者ですから決して秘を漏らす人でなく、君子の交わりの中で信さん独特の閃きで皇太子婚約近しの確信を持った。

そしてご婚約発表数ヶ月前に、グラビア用高級紙を独占で買占め、他の新聞社には紙不足で出版できず独占的大ヒットを飛ばした。

岸井 それはすごかったですね。今では絶対にできなく、ありえないですね（笑）

高橋 まかり間違えば背任罪ですよ（笑）。私には「他社には出来ない事だ」と密かに呟いていましたよ。とても近づけない様な大物との交わり、それも半端じゃなく深い付き合いなんですな。

社会の木鐸はどこへ

—今の日本は各層でリーダー不足が嘆かれています、

テレビなどはバラエティ番組が主役でマスコミとして

「社会の木鐸」の役割が失われていませんか？

高橋 かつて三中出身の岸井寿郎が東京日日（現毎日新聞）、佐野増彦が報知（現読売新聞）に君臨し、木鐸の役割を果していた。三豊・観音寺には「坂の上の雲」のように三中の青春の群像が、各界でキラ星のように輝いていた。

月原 今のメディアで大活躍の岸井さん、岩見隆夫さん、鳥越俊太郎さんなどはサンデー毎日編集長経験者ですね。

—かつて岸井さんがテレビ朝日に出演し、あまりにも好評判なため、朝日の社長が「朝日には人がいないのか」と嘆いたとか。

月原 毎日の岸井さんがテレビ朝日、朝日の筑紫哲也さんがTBS（毎日系）に出演のネジレ現象でしたな。

—岸井さんは慶応出なのに、早稲田出の田原総一朗さんと筑紫哲也（故人）に乞われて、早稲田の大隈塾を引受けているとか。

岸井 これネジレです。今日もその帰りで、全体会とセミナーが毎週交互に開かれ、講演しています。

—岸井さんも信さんによく似た性格で、人脈は桁外れなのでは。

岸井 いえいえ、信さんにはとても及びません。私は昭和19年生れのせいで、慶応では北城さん（元IBM社長）、小沢一郎、小泉純一郎、浜四津敏子の各氏と同窓、中川秀直元幹事長、細田博之幹事長、河村建夫官房長官とは19年生れということとで親しい間柄です。

月原 今まさに「旬」の人脈ですね（笑）

—大変失礼な言い方ですが、今の新聞業界で、毎日の凋落、読売の墮落、朝日の左傾といわれますが、岸井寿郎（毎日）、佐野増彦（読売）の両巨頭は草葉の陰で泣いているのでは……

高橋 ある特定な地域だけで成績が悪いのではなく日本全体どこでも不振というのは、経営者の問題です。

月原 岸井さんがかつて「あんた達がボンクラだから社

を駄目にするんだ」と怒って部長のテールブルガラスを粉々にしたという武勇伝が有名ですね。（笑）

岸井 若気の至りでしたが、手が血みどろになって大変でした。

高橋 あの有楽町時代、大森実さんのベトナム通信（「泥と炎のインドシナ」）は一世を風靡しましたね。毎日新聞は売れましたよ、本当に。

岸井 世界的な反響でした。私は大森さんの「泥と炎」に憧れて毎日に入社しました。

高橋 西山事件は毎日として西山さんを守れなかった。月刊文春に連載されている「運命の人」、あれですよ。あれからが、毎日の歴史に陰を落しました。

—信さんは明けても暮れても「人のため」でしたが、家族にとつては迷惑ばかりでしょうに、信さんの奥さんはいつとも笑顔で気品のある方でした。

高橋 奥さんは格別ですが、娘の佳代子さんも本当に立派な人柄です。私が駆け出し時代、年賀に伺うと、座敷

では社の部員や販売店の連中がマージャンや花札に興じていたが、奥さんは「高橋さん、あっちには行かない方が良いですよ。こっちでオセチを」と気づかってくれました。本当に上品で心の優しい方でした。

—「先輩に学ぶ」シリーズ第一号として、信さんを偲びながら、岸井寿郎さん、佐野増彦さんなど「三中青春の群像」を語っていただきました。信さんの意志を継ぐ高橋さん、月原さん、ありがとうございます。それから、信さんが最も信奉した岸井寿郎さんを父とする岸井さんが、お父さんに替ってわが東京同窓会の仲間として、今後共折りにふれご参加いただくことを願って、本日は話を結ばせていただきます。ご多忙の中、本当にありがとうございます。

横山信二郎さん（91）（元常勤監査役）

昭和7・5・1入社。東京本社販売部副部長、出版業務部長、出版局次長、中部本社営業局長、出版局長、常勤監査役、昭和44・1・22退任。平成13・3・16肺炎のため死去。喪主は長女三野佳代子さん。

（毎日新聞社報2001年4月3日より抜粋・引用）

（注1）この在任時の昭和四十六年、和歌山県で開催された第二十六回国民体育大会で観一・新体操部が女子団体徒手体操で優勝した。